

認知症になっても安心して暮らせる社会を

2024 OCTOBER

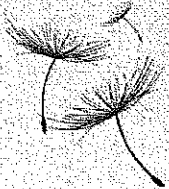
No. 531

10

月刊 POLE-POLE (スワヒリ語)

# ぼ～れば～れ

ゆっくり やさしく おだやかに



「ぼ～れば～れ群馬県支部版」  
わたぼうし  
No.494

## 認知症の人と家族の会

## 理念

認知症になったとしても、介護する側になったとしても、人としての尊厳が守られ日々の暮らしが安穩に続けられなければならない。認知症の人と家族の会は、ともに励ましあい助け合って、人として実りある人生を送るとともに、認知症になっても安心して暮らせる社会の実現を希求する。

### 巻頭言

#### 上半期を振り返り、下半期を展望する

9月のアルツハイマー、認知症月間が過ぎ、今年度も後半に入りました。今年度上半期は9月の記念シンポジウムが盛会であったこと、ライブライトアップ全国リレー中継に2度目の参加ができたことが特筆されます。

年間を通して考えた場合、通年事業である電話相談事業の実施状況がすぐに気になるところです。4月～9月の概況をお知らせすると、相談件数は153件、昨年とほぼ同数。年間の開設日数は240日、半期では120日ですので一日1件強と言うことになります。

全国どこでもそうだと思いますが、「家族の会」の電話相談は、他の業務の傍ら相談を受けるのではなく、相談員が電話に張り付いて相談を待っています。

現状では介護に伴う心理的な負担感を抱えている方、「家族の会」のような相談窓口を求めている方はまだまだおられるのではないかと推測しています。要は、必要としている人に必要な情報が届いていないのが現状の最大の課題と捉え、望ましい相談状況を生み出せるようさらに尽力したいと思う秋です。



### 目次

・ 巻頭言	上半期を振り返り、下半期を展望する	1 頁
・ 認知症を支える人のホンネ		2 頁
・ 「家族の会」の要介護認定廃止論		3 頁
・ 「わが家の認知症ケア手帳」⑤③		4 頁
・ 渡辺医院院長（当会顧問） 渡辺俊之		4 頁
・ トピックス	認知症・不明者が減少	4 頁
・ 編集後記		4 頁

### これからの予定

- 11月9日(土) 伊勢崎つどい 10時～12時 伊勢崎市文化会館
- 11月10日(日) 洪川つどい 10時～12時 洪川市中央公民館
- 11月16日(土) 館林つどい 10時～12時 館林市中部公民館
- 11月24日(日) 県央つどい 10時～12時 県社会福祉総合センター 7階 701会議室

### 電話相談

◎群馬県支部（群馬県からの委託事業）  
認知症の人と家族のための電話相談

027(289) 2740

◎本部フリーダイヤル

0120(294) 456

X(旧 Twitter)

やっています



認知症を支える人のホンネ  
 く介護家族のかつととうと専門職のジレンマ  
 (9月21日シンポジウムにおける配布資料より)



シンポジウムのためにこのテーマでの生の声を集めて資料集「ホンネ事例集」を作成しました。その中から「ホンネ」のいくつかをご紹介します。(●印 介護家族 ■印 専門職)

●忘れられない日々のこと

母の入所のきっかけは、同居の父の「こっちまでおかしくなりそうだ」の言葉でした。共倒れになつては困ると入所準備を進めているのに、今度は当の父が「本当に(母は)施設に行かないとダメなのか」と言い出しイライラしました。気持ちはわかるけれど、現実見てよ!という思いでした。入所当日は、母には「お墓参りに行くから」と言つて連れだし、父には「よくなつたら帰れるから」と納得してもらいました。母にも父にも嘘をつかなければならなかった日のことは忘れられませんが。誰かが決断しなくてはみんなが倒れてしまう。心を鬼にしながらの介護生活で、家族の前では弱音もはずさず、介護が終わった今でも思い出すのが辛い場面もあります。

●私が頑張ればいいのかも

夫を介護していますが、デイサービスに行きたくないと言われて悩んでいます。デイサービスに行ってもいいのは私で、主人は行きたくないのです。私の休憩のためにデイに行つてもらっている状況なので、もう少し私頑張ればいいのかもありませんね。でも、体力的にも精神的にも少し離れる時間が欲しいと思つてしまいます。

●無理強いはだめだと



妻のできないことが増えるたび、介護にかかる時間が増えます。本人のやりたいこと、希望を叶えてやりたいのは山々ですが、どこまで付き合えばいいのか、答えが出ません。元のように動いてほしいので体操するように強く言っていました。それは本人にとっては苦痛だったようです。虐待になるから無理強いはやめたと言われました。歩けるまま歩いてほしいという私の望みは諦めなくてはいけないのでしょうか。

●認知症じゃないと言いつ張る父

「俺はどこもおかしくない」「認知症じゃない」と言い張る父。認知症だと伝えたほうがいいのか、認知症じゃないよと嘘で付き合つた方がいいのか、...。父の中の真実は、実際の実ではないので、訂正したほうがいいのか、その世界に付き合うのがいいのか、...

「俺は間違っていない! (間違っているのに)」とすぐ怒り出すので、ご近所や知り合いに迷惑がかかるような時は、本当に申し訳なく、謝つてばかりの介護も嫌になります。



■ご家族の願いと本人の尊厳

身体拘束をしない日々を実践している。しかしご家族から「縛つてでも管を抜かないようにしてください」と言われることもある。それでも生きていてほしいご家族と、ご本人の尊厳の間でジレンマを感じることもある。

■折角のショートステイが...

24時間の夫の介護で気が休まらず妻が体調不良に。数か月後いよいよSOSとなり、ショートステイの利用を決断。その一日目の夜に「落ち着かないので帰宅してもらつた」と施設より連絡があつた。ご家族に打診する前になぜ担当ケアマネに連絡してくれなかつたのか、利用にいたる経緯も説明してあつたのに、なぜSOSを出している立場の人に迎えを要請してしまうのか、腹立たしくジレンマを感じる事例だつた。



■なかなか理解してもらえない

「デイやショートに行くとなんでもしてもらえて、家で何もできなくなつた。もつと厳しくできることはさせてほしい」とご家族は希望している。できなくなったのは認知症が進んだからでサービス利用のせいではないのだがなかなか理解してもらえない。病気の知識や、ご本人への思いやりなどの部分をうまく話せるといいのだが、難しいと感じる。

**8 時間ぶっ通し！マラソンシンポジウム**  
**こんなはずじゃなかった介護保険**  
**〜私たちはこんな介護保険制度がほしい！！**  
**「ケア社会をつくる会」が9月16日に開催**

**介護保険制度の今**

認知症の人と家族の会では今、訪問介護の介護報酬切り下げをはじめとする「介護保険制度の給付削減と負担増」の動きをなんとか押し戻そうと奮闘しています。その先頭に、鎌田松代代表と花俣ふみ代副代表が立って、各々社会保障審議会介護保険部会と介護給付費分科会の委員として給付削減・負担増反対の声を上げ続けています。

今、この動きは「家族の会」だけではなく、日本の福祉を真剣に考える多くの人が共に歩む大きな流れとなりつつあります。高齢社会をよく

幅広い方面からの再検討のテーマの一つとして、介護保険制度創設10年目の2010年に「家族の会」が掲げた「要介護認定廃止論」が取り上げられることになりました。たまたま、当時「家族の会」で介護保険について

する女性の会が中心となり「ケア社会をつくる会」を結成し、「家族の会」も合流して取り組みを進めています。中心となっているのは、大熊由紀子さんや上野千鶴子さんたちです。そしてケア社会をつくる会は、去る9月16日、標記の8時間ぶっ通しのシンポジウムを開催しました。このシンポジウムは、介護保険の創設に携わった当時の官僚から経済学者も巻き込み、介護保険創設の意義と現時点の課題について幅広い方面から再検討するという壮大なものでした。

**認知症の人と家族の会の「要介護認定廃止論」**



私たちが、要介護認定という制度そのものに疑問を持ったきっかけは、2009年の認定基準の改定の動きとそれを巡る大混乱でした。私たちと同様より正確な認定システムの構築に力を尽くしていると思われた国の姿勢に、システムを恣意的に操作しようとする意図が見えてきたのです。それに加えて、新規介護度に不満があれば以前の介護度を選択できるという無責任ぶりにも驚かされました。国の改定の動きは、より客観的な指標づくりを目指す方向には向いていなかったのです。(後に、当時の政策担当者は、「支給限度額を導くために要介護認定という手続きをとっている」と語り、また、「要介護認定の本質はサービスモデルとそれに基づく支給限度額なのです」とも語っています)

**新たなシステムへの模索**  
 こうした経過を通して、私たちは制度の主人公にふさわしい支援を決定するために、要介護認定とは別のシステムがあってもいいのではないかとの思いにいたったのです。そして思い至ったのが、制度発足10年で必須の会議として定着してきたサービス担当者会議でした。担当者会議には、何より利用者本人、家族、ケアマネジャー、事業者、主治医が参加します。これに保険者を加えた会議、例えば拡大担当者会議(又はケアマネジメント会議)における合議によって、その人に本当に必要なサービスの種類と量を決定するのです。制度発足後10年、経験を積み重ねたケアマネジャーに大きな役割を果たすことが期待されます。

要介護認定本位ではなく、利用者本位の制度に、これが要介護認定廃止論の本質です。

詳しくは、「提言！要介護認定廃止」(クリエイツかもがわ2010年12月15日刊「家族の会」編)をご覧ください。



### 渡辺俊之の「わが家の認知症ケア手帳」⑤ 適切に声かけをしよう

渡辺医院院長（精神科医、当会顧問） 渡辺俊之



一人暮らしの 80 代の女性が「最近、物忘れが出てきた」とクリニックにやってきました。「先生、ここに来るのも迷ってしまいました。でも優しい小学生在声をかけてくれ、ビルまで一緒に来てくれたんですよ」と安心した表情を浮かべました。「困っている人がいたら声をかけてあげましょう」と私たちは教わってきました。外国からの旅行者も日本人の優しい声かけに感謝しているようです。

ただ、認知症の人の場合は、道が分からなくなり、不安と困惑でいっぱいな時に声をかけると、逆に驚かせてしまうこともあるようです。実際に私も良かれと思って声かけをして、げんな顔をされたことがあります。

愛知県豊浦町の「認知症サポーター養成講座」には、認知症の人への声かけを学ぶ講座があります。声かけのポイントとして、①後ろから声をかけない、②できるだけ一人で声をかける、③穏やかに話すと話す、④相手の



話に耳を傾ける。場合によっては警察や役所に連絡をする—を挙げています。講師を務める社会福祉士の小倉恵美さんは「声をかけるのはすごく勇気がいるけれど、声をかけないで通り過ぎてゆく後悔と、声をかけた結果『何事もなくてよかった』と思うのだったら、後者の方がいいと思う」と話します。

私たちはつい「失礼かもしれない」、「おせっかいかも」と、困っている人がいても声かけを躊躇してしまいがちです。後悔しながら立ち去るよりも、勇気を出して声かけをしましょう。その経験はあなたを豊かにするはずですよ。

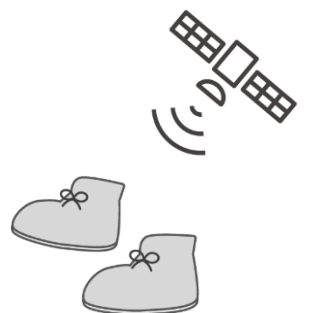
介護をやり終え、介護を受ける人が満足して眠りにつくとき、あなたは一日の達成感を感じていることと思いません。

### トピックス

認知症 不明者が減少

県警が昨年把握 152 人、GPS 普及が奏効

（2024 年 10 月 1 日付上毛新聞一部省略）



昨年 1 年間に県警が把握した行方不明者 1109 人のうち、認知症やその疑いがある人は前年比 33 人減の 152 人だったことが、県警のまとめで分かった。全体に占める割合は 3.9 ポイント減の 13.7 ポイントで 6 年ぶりに減少に転じた。県警は要因について、「特定は難しい」としつつ、衛星利用測位システム（GPS）端末を身に着けるなどの対策が普及し始めているとして、活用を呼びかけている。

県警は「上州くん安全・安心メール」で行方不明者の特徴を配信。これまでに目撃者から情報が寄せられ、発見につながった事例が複数あったといい、県民に登録を呼びかけている。

人身安全対策課によると、全体の行方不明者は前年と比べて 59 人増えた。過去に行方不明になった人を含め、所在が確認されたのは生存・死亡を合わせて 1228 人だった。発見までの期間は当日 233 人、2～7 日 430 人、8 日～1 か月未満 105 人、1 か月～半年未満 70 人、半年～1 年未満 162 人、1 年以上 228 人だった。認知症関連の発見者は 148 人で、9 割が 1 週間以内に見つかっている。

同課によると、靴に GPS 端末をつけていた高崎市内の女性が東京都内で保護されたケースがあったという。同市の認知症による徘徊が見られる家族に無償で GPS 端末を貸与する同市の「はいかい高齢者救援システム」を利用していた。

同課は GPS 端末の活用とともに、発生から時間が経過すると搜索範囲が広がるとして「早期発見には早めの届け出が有効だ」としている。

（時田葉月）

### 〈編集後記〉

秋、金木犀の季節です。嗅覚が衰えた私の周りにもその香りは漂っているはず。妻の母もまだ頑張っています。

（田部井）